“MY TOWN”うぉっちんぐ

歩き足目デス&ラテス

Vol.86

南予の三校に見る、実業学校の時代

岡崎　直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

「必ず邑（むら）に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」と高らかに国民皆学が謳われたのは、明治5年の学制発布だった。それ以後、紆余曲折の中で兎にも角にも殖産興業・富国強兵の路線が貫かれ、矢継ぎ早な近代化の時代は進行する。やがて日清戦争の後、諸外国に認められ始めた頃の同32年、実業学校令が施行される。名実共に近代国家となる過程で得た実利として、産業界が発展期に入り、その人材養成が急務となった社会変化だと見ることが出来る。

【東宇和郡立農蚕学校】

南予においては、明治41年5月に農蚕学校が創立をみる。3年前の郡農会で建議され、宇和と野村で立地争いがあったものの待望の開校であった。この設立に尽力した人物が末光績（いさお）、地元の中町出身にして札幌農学校の卒業生。彼はクラーク博士の門下であった尾見五郎を招聘、初代校長とし、教師陣も同校出身者を中心に学校運営の基礎とした。こうした教師側の人格は周辺でも群を抜き、農業系学校に不可欠な実習地も教師や生徒自らが汗して造成された。クラーク精神の〝紳士たれ〟〝自由教育〟を柱に、人間形成と地域開発の充実した教育が実践されていった。現在の県立宇和高等学校の正門を入ると、大正2年に建つ「剛健の碑」があり、当時培われたその伝統を物語る。特に宇和郷の養蚕業は地域を豊かにし、そうした南予一円の底上げは、大正初期に愛媛が西日本一の養蚕県となる事にも寄与したと思われる。同7年には県立宇和農業学校と改称。

校長尾見五郎による揮毫「剛健」の碑

輩出した人材には、同11年に四国で最初のメーデーを実施した日吉村の旧庄屋で戦後社会党代議士となった井谷正吉（第4回生）が居て、その回想によれば、2年生時に護憲運動の尾崎行雄が来校し、講堂でその講演を聴いている。第8回卒業生には菅原傳（つたえ）がおり、末光績校長（三代目）の薫陶を受けたものか、日本体育専門学校（後の日体大）の設立に参画、戦後は郷里に戻り、魚肉ソーセージのスモークミート開発（昭和25年西南開発設立）や、後に開明学校保存につながる（社）宇和郷土文化保存会の設立（昭和48年）など、八面六臂の活躍を見せる。

【私立（伊方）実践農業学校】

大正3年4月、実業家佐々木長治によって伊方村（当時）湊浦に実践農業学校が発足する。氏は銅鉱山経営のかたわら、西南銀行の創設、豊後電気鉄道の設立にも関わる立志伝中の人物で、地

旧佐々木長治家（明治38年築）

域の発展は人材育成に有り、と前年に私財を投じ「佐々木愛郷會」を発会しての開校であった。初代校長に小島喜作農学博士を置き、彼もまた札幌農学校クラーク門下だった。現在の伊方中学校中庭には、佐々木の功績を称える記念公園が設けられており、いくつかの碑が並ぶ。中でも校長小島喜作の揮毫になる「土を愛せよ」は、師を慕う卒業生によって昭和4年に建立、この学校の発足理念が垣間見られる。それは農学校としての土への概念であると同時に、佐々木の志向する郷土愛を育成する事に通じる。

校長小島喜作による揮毫「土を愛せよ」の碑

全国においても、大正8年には農業学校が300校を数え、実業学校令の改正に伴う学科制度の規定によって翌々年には「農業・養蚕・園芸・畜産・林業」の5学科が整う事になる。大きく見れば、やっと近代農業における人材育成の基盤が整い、この頃の日本は国家が農本主義に基づき運営されていた事も分かる。やがてこの学校は昭和19年に伊方農業学校と改称になり、戦後23年に川之石高校園芸科に引き継がれ現在に至っている。

【上須戒青年学校明玄農士道場】

この建物が解体されたのは平成20年の事だった。長らく大洲少年自然の家として利用されていたが、それは少し特異な形の印象深い建物だった。赤瓦の入母屋屋根がその妻側を正面に堂々と建ち、しかもそこには禅宗寺院に見られるような火灯窓が一つ。昭和13年に建てられた上須戒青年学校、その名も明玄農士道場。その名からしてありきたりな学校ではなさそうだ。史料によれば、発起は村長梶谷永五郎をリーダーに昭和10年に開墾鍬入れ、6町歩の原野に挑む、とある。補助金に頼らず、村の自主財源と村民奉仕によって創設され、スローガンは〝汝の郷土を開発する者は汝自らなり〟。つまりは農のサムライを育成する道場という訳である。生糸の暴落による村の疲弊が背景にあり、時代相ともあいまってドン底から立ち上がろうとする精神面に注力した学校創始だったとも言える。養蚕業で栄えた大洲盆地の外れ、山間立地のこの村で、自主独立の気風が養われた。中江藤樹の陽明学が底流にあったかと思える明玄は、まさに「くらきを明らかにする」という意である。だからこそ、時代背景の右傾化とはうらはらに、建築を見る限りそこには洋風の明るさも醸され、厳しい中にも希望のある教育環境だった事を想起させる。

明玄農士道場

正面の火灯窓

講堂の洋風意匠

これら三校の事例から言えるのは、現代の偏差値教育ではない何かがそこにはあり、実業を通じて社会貢献すべき人材を育てる意図が明確であること。そしてそれを成し遂げようとする熱い故郷愛が、それらを企図した人々には共通していること。その清々しさが今も胸を熱くする。